

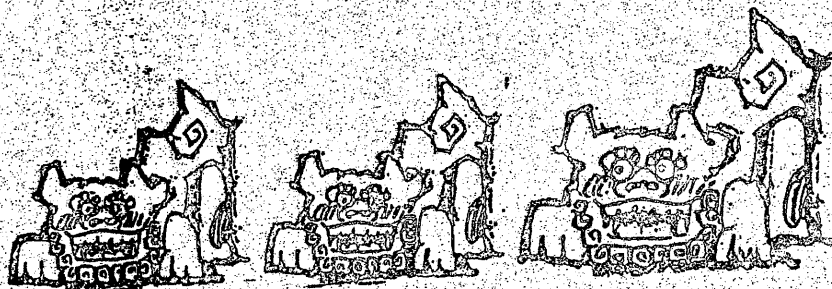
シーサー 屋根獅子通信

- 屋敷地を生産と生活の拠り所としていこう!
- 二重加入・二重活動方式を推進していこう!
- 未組織労働者の団結の輪を拡げていこう!
- 鋭き(屋根獅子)眼をもって一坪反戦運動を担っていこう!

3号

一九八七年
＝集中掲載＝

一坪反戦運動の拡がり求めて
座談会



一坪反戦地主会

民間未組織労働者ブロック

小林幹雄

反戦と叫び走り硝煙を喰ぐ
フェンスあり戦場と人の交差して

この底に人の眠れる夜の海
叶ぬも岩はう密林二人死ぬ

静かなり如月の日照れる一日
炎天にカゲロウと立つサンシンのうた

キビ畑また来たかぞと思う道
カサカサと人の住み居るキビ畑

酒酔うて柱に休めばブナガヤの笑う

荒崎にただた波の音ばかり

緑なす天に近き山原路

：座談会：

「一坪反戦運動の抗がりを求めて」

座談会出席者 - 7名

発言者 -

新崎盛暉
大宮育雄
安里成治
小林幹雄

一、座談会を設けるに至った経過

(民間未組織労働者ブロックの側から)

小杯

大宮さんのレジュメに「春に一旦、幹事

会で議題とすることが確認されている共闘問題は」とあることについて、事務局の与藤さんからブロックに話しがあつて、それは具体的にどういふことなのか?というところで、一つは教育の反動化に対する集会に一坪反戦地主会が、協賛団体になつている(それを知らない人もいたが)そういう他の団体との共闘をやめるのかやらないのか、そのあたりのことと もう一つは、皇太子の来沖の問題で、一坪反戦地主会として取り組もうではないかと民間未組織労働者ブロックの方から提案がされて、それについては全体としては取り組まないと、ブロックで主体的にやつて下さいということになつてゐた。こういった経緯から一坪反戦地主会としては、他の団体との共闘なり、他の課題についての関わりなりに、どういふふう

にして連帯していくかについて、話し合つていく必要があるだろうということで、幹事会で話し合いがあるということ、であるのならその前にブロックでも話し合いをして、一定程度の考えをまとめてみようかということ、一度集まりをもつた。そのときにそれぞれの考えを出していこうということになつていて、一応のたたき台として文書が出された。その時は、話し合いというよりは懇談会みたいなになつただけけれども、この文書に対する結論がどういふふうに出たのかということ、ろまでは、私の受けた感じでは出なかった。ただ、こんなものではないか?という感じであつた。むしろ具体的にどういふ闘争課題を提起していくのか、どういふ運動を展開するのかという、具体的な提起の方に関心があつたやうで、一般的に一坪反戦地主会としてどういふふうに進めるのかということではなくて、具体的な課題はなにかということの方により多くの関心があつた。

大宮：今日の座談会に至った経過を補足すれ

ば、幹事会でいづれ共闘問題ということを論議するようになるということが確認されている。そこにある程度ブロックとしての見解を出せるようにしたい。そういうことがありまして、そのためにブロック通信の第3号を、この問題に焦点をあてて作ってみて、それをブロック内での論議の始めにして行くという計画が、編集の方から出された。その時に新先生にも一筆書いてもらおうという事になって、新崎先生からはそれよりは座談会の方がよいのではないかということになって、この場が設けられた。だから今日の座談会はブロック通信第3号に附録する予定です。それをたたき台にしながら、ブロックでの論議を深めていきたいということです。

(新崎氏の側から)

「一坪反戦地主会」が、運動として、組織として、一定の市民権を得ることによって、

新崎：この前のこの文書をもらって、何かコ

メントを書いてくれということであつたから、急にそう言われても、ここに書かれている事等を互いに確認しあいながら、ボクの考えは、ボクの考えとして言うという方が、きつときとまるにちがいないということです。

共闘問題というか、と言うよりは、いまの話で言えば、我々が限定して掲げている「軍用地を生産と生活の場へ」という一つの目標があつて、それに対して例えば皇太子来沖の問題だとか、「日の丸・君が代」だとか、そういう課題にどう取り組むべきかという両方があると思う。

共闘問題云々という事で言うと、先の卒業式での「日の丸・君が代」問題の時に、冲教組から、冲教組が中心になって一日だけの実行委員会を作つて、与蔵公園で「日の丸・君が代」反対集会をやりたい、一坪反戦地主会も加わってくれ、という要請文が来たわけですよ。それに対してどうするのかと、でももちろん大方の一坪反戦地主というか、そういう立場の人間で「日の丸・君が代」の問題について、その反対集会ということに、それ自

体に異を唱えるのはいいだろうけれども、運動課題というか、目標を非常に限定して我々はこれまで進んできた。その時にすぐでできたのが「これはボクと城間君とで、また間際でそういう要請をして来たからどう対応したらいいか」ときに、二人で話し合ったのは「とりあえず実行委員会に名前を連ねるのはいいとしても、これはやっぱり前の第1回か第2回の総会の時に、民間未組織労働者ブロックの方から皇太子来沖について問題の提起があった。その場合に、とりあえずは一坪反戦地主会というのは「軍用地を生産と生活の場へ」という一点で賛成する者全部を纏めていこうという形なのだから、各ブロックで皇太子の問題なり何なりを課題として、あるいは方針として掲げることについては全く異論はないけれども、それを例えば総会とか幹事会で決定して全体としてそれで行きますという形になれるかどうかで、これはブロックとしてやって下さいということになった話があることと、この「日の丸・君が代」とはいったいどうなるのかということがあって、これはいずれ時間をかけてきちっと論議をしなければ

いけない課題であろうということになったわけです。

順序は逆になるけれども、民間未組織労働者ブロックが提起したときには、こういう課題にも一坪反戦地主会として取り組むべきだという問題の提起であったわけで、一坪反戦地主会というのは反戦地主を支援するつまり基本的には「軍用地を生産と生活の場へ」という大きなスローガンがあつて、具体的には反戦地主の支援だとか、契約拒否運動の拡大だとか、それに直接関連する方針をいくつか掲げていて、そこに例えば皇太子来沖ということが出てきた時に、これは直接的にストレートに結び付くものではないのではないかと、だから、それはそれぞれのブロックに委ねたい、ブロックがやるのは当然のこととして一坪反戦地主会全体としてこれはおかしいとかどうか言う事では無いのであつて、こういう形で行きたいということになったわけで始めから課題として出てきた課題であつた。

ところが、これまで沖縄社会ないしは革新勢力の中に於ける一坪反戦地主会の位置も変わってきている。それは、ある程度一坪反戦

地主会の力量が認められてきたことにもなるわけだけれども、一坪反戦地主会というのはこれまでどちらかと言えばいわゆる旧来の革新勢力というか、簡単にたとえれば、既成左翼とか呼ばれたりする既成の運動とかいうふうには総括されてしまうような従来の運動の中では、非常に異端者扱いをされてきたわけで、一坪に集まって来ている人達は基本的に個人参加であり、いろんな労働者もいたり、いろいろ組織を持つている人達もいるけれど、それは組織として原則的に加盟するとかそういうことではなくて個人として全部加盟している。そういう形をとっているわけですね。だから、旧来の組織に所屬している人達も入っているのだけれども、しかしそれは流れとして言くと、かなりCTSも阻止闘争の流れを汲んでいる部分が軍用地問題で再結集したという現実、実際的にはそういう傾向が強かったわけですね。例えば「金武溝を守る会」であるとか、我々で言えば「琉球風の住民運動を拓げる会」、これも一つの流れだし、それから労働者部分で言えば「反CTS労働者連絡会議」の流れとか、CTSの施策というのは

革新知事が導入してきたということもあって、革新共闘会議はむしろそれには取り組めないという状況があつて、「金武溝を守る会」とほぼ同じ戦列に立とうとしたのが「拓げる会」であつたり、「反CTS労働者連絡会議」であつた。その部分が米軍用地特措法による5年間強制使用の問題を経て、平安さんがなんとか反戦地主会にテコ入れせねばいかんという時（平安さんと問題の提起の仕方のは、平安さんは旧来の組織をそのまま反戦地主会の中に呼び掛けていくという考え方であつたわけね。だから自分の土地を提供する場合に、これは県労協加盟組織が買つて欲しいという形の問題提起であつた。それで、県労協の幹事会はそれを是非やりましようかと決定したはずだけれども、実際、組織として取り組んだのは全警連だけだった。平安さんの土地を買うというところまで、組合の内部で大会決定してやったのはそれだけだったという状況の中で）、平安さんの提起している問題を受けて（一坪共有運動という名称は平安さんはその時から使っていたんだよね、使つてはいたけれども実際は一坪ではなくて、組織が何

百坪も買つてという形であつたのだけれども、平安さんの提起は非常にいいけれども、これはやっぱり、それこそ我々の言つた言葉で言えば、草の根の大衆運動・反戦運動をもう一度再組織していくようなものとして取り組まなければいけないのではないかと言つたのに対して、平安さんはやはり非常に手続的に煩雜である、だいたいそんなことが出来るのだらうか、つまり何百人もがガシヤガシヤ集まつてね登記をするとか、そういう確かに煩雜なのよね登記手続き一つとつても、で、組織がやれば簡単だと。そういうことも若干あつたのだけれども、実際には全電通しか動かないという状況の中で、平安さんとの距離がまた縮まつてくる。じゃあ、本当にやつてみるかということから出発してくるわけですよ。

話しが少し長くなつたけれど、要するにそういう形で反CTS闘争の流れを汲んでいろいろなもの、そこで再結集する形で米軍用地特措法と平安さんの提起を受けて一坪反戦運動ができてきたものだから、従来の選挙の時にすぐ革新共闘会議という形で結集し

うるような部分からすると、異端派というのがどこかにあるわけね。ただ、これはあまり表面には出ない。つまり、スローガンに掲げているのは「軍用地を生産と生活の場へ」にであつて、他には殆ど何も他を批判してもしなければ、何もしていないということに進んでいくわけだから。

そういう運動の中で一つの市民権を得るみたいな形になるのは公開審理の直前からで、この前の一坪反戦地主会の臨時大会で違憲共闘会議加盟全組織に訴えるという特別決議をやつて、我々が全部の団体を説明して回つた。

で、向うとしては記者会見をした段階でもそうだったのだけれども、統一的な県民大会は無理だという話であつた。そこで、我々が動くことによつてというか、あるいはそれを渡りに船(つまり合つていた組織も、実際には困つていた所もあると思うのだけれども)で統一化される中で、違憲共闘会議の中では公開審理闘争、あるいはその前段集会の中には「一坪反戦地主会」を共催団体にすることには抵抗があつたわけね。要するに、「一坪反戦地主会」というのはいるんなのが入つてい

ると、それで好ましくないという。ということもあって、共闘はするが共催はしないとかそんないろいろな条件をつけて、一番違憲共闘会議の中で問題になったのは東京行動団の窓口が総評なのかそうでないのかという例のことなんだけれども、それ以外にこういう共闘はするが共催はしないとかいう、ゴチャゴチャした問題があつたわけね。ところが、あの我々の提起からそれを受けて県民大会とか、要するに統一できないものは棚あげにして、一本でやろうというわけだから、当然我々の排除ということにはならなくなつて、文句なしに違憲共闘会議の幹事会では五者共催・五者共闘で公開審理をやっていくことになつて、五者協議会というのまでいつのまにか公認されてくるわけで、そういう過程で今度は神教組が逆に「二坪反戦地主会」を正式な市民権を持つた組織として、こういう実行委員会（教育の反戦化に反対する）にも加わつて欲しいと来るわけだし、県労働が東京行動に行く時にも「二坪反戦地主会」も当然実行委員会に参加してくれという話になつて、つまり、以

前はこちらから何かやることはあつても、向こうからこちらに呼び掛けて来ることは無かつたわけね。で、今度は課題（共闘）の問題が、内部で提起されたものが、今度は共闘みたいな問題で冲教組から提起されてきた。それは、こちらが革新諸組織・諸運動の中での一定の市民権を良くも悪くも獲得してきた段階で、新たに生じてきた問題である。

幹事会へ提起したのは、とりあえずこういう形で「日の丸・君が代」の実行委員会を一日共闘でやりましたけれど、これは前に皇太子の問題もあつてそれはブロックで取り組むこととされているし、白保の問題なんかも一例えば民間未組織労働者ブロックとか北部ブロックとかは、正面から運動方針として掲げていますよね。だから、そういうことも関連して初めは非常に困つたわけね。幹事会としてやるか、「二坪反戦地主会」としてでなくて、「二坪反戦地主会」幹事会として幹事会の意志はこうです。ただ、これはブロックを拘束しませんという形でやるべきか、ということもあつただけけれども、こういうことも含め

て、きちつとした論議をしようということになつたのですね。

それでボクの考え方で言うと、大会の度にあの課題もこの課題もというのはいろんな人から出てはきているわけね。しかし、最初からそういうことであつたから、あまり論議的に一坪反戦地主会が自分の力量に余ることをあれもこれも勝負うことはやめて、それぞれがそれぞれの地域なり、ブロックなりでやつて下さいという形でこれまで来ています。ただ、どこかでこれは決着をつけるというか、きちんとした論議をまず起こす必要がある問題であるだろう。

ただ、ボクが考えているのは、限定的に一坪反戦地主会としてはやつていた方がよいのではないか。つまり、ブロックなんかの一坪反戦地主会は、個人とかブロックが主体になつた運動なのだから、幹事会決定とかそういうのは、いわば行動の指針というか、つまり法的な問題とか情報とか全体がわかるわけではないのだから、一番集約しやすい所で指針として提起する。で、これのうちに取り入れられ

るものは参考にしながら、各ブロックは具体的な方針を決めるのであつて、したがつて、一坪反戦地主会には統制違反みたいなものはないのだ、これをやっちゃいけないというものはないのだ、というような言い方をしているけれども。

例えば、白保の問題などがありますよね。白保をやっている部分と一坪をやっている部分というのは、かなりダブっているのだけれども、一坪反戦地主会が白保をかかえたらあれだけ自由にできないのではないかと、いう気もするわけ。白保に重点をおく人達は、白保を守る会に集まつてそれとしてやつていく、だから、同じ人間がやつていてあれをやる時とこれをやる時には名前が変わつても、それはそれでいいのじゃないか、その方がむしろ動き易いのじゃないかという気がボクはしますけどね。

二、ブロック活動の意義・現状・そして展望

大智 …… どのような所から意見を言つて良いのか、

なれていないのでよくわからないのだけれども、一坪反戦地主会の結成の過程と、要するに結論としては「一坪反戦地主会」というのは、やっぱり「軍用地を生産と生活の場へ」という限定的な活動としておいて、より具体的な方針は各ブロックでやつていくようにした方が自由に行動が出来るし、好ましいということですけど、基本的にボクもそう思うのですけれども、ただ、今非常に問題意識としてあるのは、公開審理が終わつて1987年5月15日以降に「一坪反戦地主会」が運動体してなお継続してゆけるのかどうか、今非常に問題意識としてあるわけです。というのは、各ブロック主体にしてという時に、この三年間位で主体的な活動を作れてこれているブロックというのはあんまりない。今後できてくるという保障はむしろ少なくなつてくるわけで、そういう時に、では「一坪反戦地主会」運動と

いうのは、できるブロックだけはやつていったらいいし、やつていく体制のない所は、運動体としては解消していつても仕方ないのかどうか、その辺のところが問題になつてくるのではないかと思うわけです。

小椋 …… ボクが考えるのはね、今新崎さんが言われたことは、みんな聞いていると思うわけね。聞いたたり讀んだりして、こんなにして、さて、こんなになつてきたのかという具合に。ところが、そういう会員の人達がどういう具合な活動形態を取っているのかというと、まだなにか上を見ているような感じがするわけね。こういうことはどうするのか、こうすべきか、ああすべきかというところで、自分でこう考えたから、じゃあ、やろうかということにはならず、これを幹事会に持つて行くとか、そこで決定してもらつてやつていくとか。だから、まだ今、新崎さんが言われたようなことが自分の習慣にはなっていないというか、そのところをどういう具合に変えていったらよいのか。

新崎

それは、確かにその通りなのよね。こ

ういう運動体であるべきだと言って宣言したのだけれども、実際に運動をやってきた人達は、やはり労組とか政界とかいるんな所で運動していた人達が集まって来たものだから、運動上はそうだ、そうだと納得はしても、体質化している発想法とか、そういうのはやっぱり従来の組織というか、大会とか執行委員会とか三役とか、そういう発想それが体質になっていて、運動として掲げている部分とうまくかみあっていないのはあるのではないか。だから、それをどうするのかという問題ともう一つはこういうことだと思うんだよねー。

やっぱり、C.T.S.の問題を取り組んできた流れだったり、地域的な「イモの会」なども含めて、住民運動の流れからこれは出発してきたので、ブロックの場合にも地域というものを非常に強調してあるのね。そして、確かに地域としてまとまり得る所、例えば北部などはきちんとまとまったわけね。ところが、那

部とか中部などはなかなか地域としてまとまりきれないわけさ。だから、地域だけを強調しすぎないで、若干職域別とかね。そういう発想も、織り込んだ方がよいのかもしれない。安里……それはあると思う。いいと思う。

新崎……それは「かも」であって、まだボクはよく分らない。

糸満とか、居住区がきちんとしている所は、ブロックがブロックとして動いている。北部区ではないにしても。やっぱり那覇とかコザとかいうと、どうしても地域ブロック形成自体がむずかしいのかなー。だから、あまり地域にこだわらないで、そういう意味では民間系組織労働者ブロックの二重加盟方式というの、一つのおもしろい実験だったと思うのだが。これまでの経験を、民間系組織労働者ブロックとしてどう総括しているのか分からないのだけれども。

大宮……今、それがこの場で求められているのですか。

新崎 「いやそうじゃなくて、今後の運動の間

題と、さっき彼(小林)が提起した「ブロックが自立して」というけれども自立しきれないで、自分の所の自前の発想というよりは、どこか幹事会の決定・指示を待つとかね。そういう体質の醸しとあなた(大宮)の1987年5月15日以降どうなるのか、という両方から始めて言っていることなのだけれども。

小林 「5月15日以降に「一坪反戦地主会」運

動が、もつのかもたないのかということがあ
るのだけれどもね。これも、一応建前として
は、思の長い運動をやるうということでは、
されているのだから、建前としては、だから
5月15日以降解体するとは誰も思っていない。
続けていくという意志はあると思うわ
け。

大宮 「一坪反戦地主会」そのものとしては、

当然権利者集団ですから、売らない限り続い
ていくわけですよ。それはそれで意義のあ

る部分もあると思うんですよ。ただ、それで
良いとするのか、それとも運動体として持続
させていくのか、今問われていると思う。
では、運動体として持続させていくべきだつ
たら、その保障をどのように作っていくのか
ということが論議されていかないと、いつも
いつもブロックの活性化一般で終わってしま
うのではないか。

新崎 「ただ、例えば民間未組織労働者プロッ

クなんかの場合、こういう「一坪反戦地主会」
の運動があつてあつてブロックが形成された
ので、それぞれ何かをやらなければいけない
と思つていた人達が、運動が出来るのような
場が作られたとか、そういうことが有り得る
のか、有り得ないのかなんだけれども。

ここに書いてあるのはどういふことなのか
かな。表現手段を持ちえてこなかった部分に
その場を与えた。」というのは、具体的にど
ういふことなのかな。

大宮 ……これは、民間未組織労働者ブロックの存在意義にもなるだろうと思っっているのですけれども、現在の沖縄の反戦反基地闘争なり、諸闘争というのが、ほぼ県労協だとか護憲反安保などとして組合主義的な政治闘争として行なわれている。圧倒的多数の非組合員、農業やっている人とか、資金労働やっけていても組合を持っていない人達は、結局「日の丸・君が代」問題とかでも、それに怒りを持っていながらも、それを表わす場が、自分がそれを実現していく場というものが、なかなかないというのが現実だと思っうんですよね。そういう時に、個人加盟の「一坪反戦地主会」運動というものは、そういう人々のエネルギーなり意識なりを十分組み尽くせる形、それは従来運動の中では無いということだと思っうんです。という肯定的な側面があったのではないかと思っっているわけです。

新崎 ……ボクもまさにそうだと思っうわけよね。一つの意義として。そうすると、そういう形でまとまり得た部分というのは、例えば「日の丸・君が代」も含めて、そういうことが全部やっっているわけだよな。我々「一坪反戦地主会」の運動の中では、ブロックというのが活動の行動の主体であると規定されているわけだから。

大宮 ……ところが、那覇、中部なんかで、今までにブロック活動が定着していない、という所が実際にあるんですけど、それはさっき小林さんが言われたように、いわば上を向いた形というのが強くあると。で、今まで諸個人としていたのが一つの何んらかの組織を手にしたとしても、実際経費不足ということがあつてあるのか、ないのかよくわからないですけれどもなかなか自分達で作っていくのだというところまではならない。誰かが作つて、自分の結果できる場を作ってくれる、ブロッ

クを作ってくれる、というのを待っているというのが、やっぱり現実なのではないだろうかと思う。

新崎

「もう一つボクは逆のこととも思うのだけれども、本当に必要性を感じている所が、ブロックが出来たのではないかと。北部でも民間でも、例えば北部などは、何をこちら(那覇地域)でやっているのか、とある意味では地域的にも疎外されている所で、これを中心にして北部ブロックとしてきちっと動くわけよね。ところが、那覇とか南部とかは組合とか何かにみんな所属しているわけさ。組合の活動家であつたりして、そっちの方が忙しかね。また、こっちの方(組合)でやれるとかね。『日の丸・君が代』なんかいったら、こっち(組合)の職員で出ていくとか、そういうのもあると思う。」

大宮 「そういうのもあると認めます。」

中里 「ブロックはね、結集する必然性が無いということがある。」

新崎

「だから、ブロックを作る必要性がある所では、ブロックが出来たと思うわけなんだ。そうであれば、出来ない所はオマエ達出来ないのはオカシイとかそういうことよりも、出来た所の意味をね、評価していけばいいのではないかと思う。」

例えば、こういうこともある。反戦地主という人達がいますよね、そして反戦地主会というのがあるわけです。反戦地主会に所属していない反戦地主がいるわけよね。しかし、この反戦地主であるという意味はやっぱり大きいわけね。それから、『二坪反戦地主会』の会員の中でも、訴訟などをした時には全部が集まってはいないわけよね。何んらかの事情で訴訟とかそういう処までは加わって来ない。そういう人はそういう人でいいのかもしれない、とボクは思うんだ。訴訟にも参加せず、公開審理にも一度も出てこず、あるいは、プロ

ツクなどでも白保やら天皇来神の問題にも取り組める部分、あるいは取り組めない部分、そういった人なものを積み上げていって、しかし、一書活発である部分の背後・背景に、そういう人を厚く結集しておくという意味もあり、そういう気がするのだけれどもね。

大官 ……そういわれたら、そうなんですよね。

必要とする部分、感じる部分が、やっぱり必要とするものを作っているのだろうし、必要としない部分というのは他の形で出来るとか、いろんな意味で必要としない部分というのは、もしかしたら「一坪反戦地主会」運動というのは必要ないということなのかもしれない。

新崎 ……福岡君などの話では、どこかのプロ

ックで総会しても20人位しか集まらなかつたけど、20人位集まった人達というのは組合の中ではあまり動けない、例えば総合事務局長とか、そういう人達がそこにきて署名なんかでも各戸廻ってやろうなんていうことにな

ったりするわけだ。あのブロックだったら本当は何百集めなければいけないはずなんだけれども、やっぱり、そこではブロックとして集まったのは20人位で、しかし、それはそういう所では出来ない人達、組合とかで。

大官 ……組合少数派ブロック

守屋 ……真和志ブロックでも総会やったのだけ

れども、来たのは12人。だいたい組合やっている人達だけれども、なかには入っていない人もいた。ただ組合の中で見ている、組合運動はわりとわりとやっている人で来る人、来ない人というのは、わりとはつきり分かれていますね。組合中心にやっていくのか、一坪反戦中心にやっていくのか。だからといって、ブロックの集まりには来ないからといって、非協力的かというと別にそういうことではなくて、署名とかね、チケットの販売とかだつたら、やっぱりやるんですね。ただ集まる時に来ないだけで。

新崎「さあ、一坪の共有を、と始める時みたいにはワァーと盛り上がりたなくても、あちこちにいるんなものがあるって、それが独自に動き出していけばね。それなりの存在意義がありそうな気がするし、ボクは5月15日以降どうなるのかということについて、まだまだ我々提案出来る問題があるというか、見えてきた。道に、見えてきたような気がするけどね。

大宮「はあ、例えばどのような。

新崎「例えば、法律的にややこしいとみんな弁護士まかせ、ところが、弁護士も忙しいものだからその場の知識でやっていて、一番問題だったのは意見書(仮用養への)の問題、正直に出したちもうそれで意見を言ったことになるから、意見を公開審理の場で言えつていうから、みんなそうやってたらそうでなかったとかさ、ああいうのについてはこちらも随分勉強した部分もあるわけね。

それと、これも相手をきちんと探さないといけないのだけれども、契約地主の土地とかね。そういうのを買ってやっていくとか、そうすると、向こうは契約軍用地を今度は契約しなくなるのだから、強制使用の手続きの方がやりにくくなってくる。それは、また新しい法律作ったりさ、向こうは力持っているのだから、いろんなこと、強引なやり方考えにくるだろうけれども、こちらとしてはいろんな運動のきっかけは、持っていないんじゃないかと思うんだけどね。

それから、一番問題なのは、前から指摘しているが、うまく取り組んでいないのに、小塚の軍用地の問題があるよね。使えないような土地返されて、いずれ困ってくるだろうし再契約なんていうことになりかねない。上原太郎さんなどの所へ、ボクや金城さんなんかと一緒に連れていって働きかけているのだが。

安里「前にOOさんと飲みながら話し合った

のだけれども、自営隊の側というより施設の
側の言っているのは、バスの発行ということ
だね。こっちは上原さんだったら上原さんの
土地をね、一坪を、今の一坪と同じようにね
まとめて買うのではなくて、それぞれの一筆
から一坪なり一平米を買ってね、地主という
ことでバスを発行させて向こうの土地に登る
形であるけどね。登るかどうかもゆるより
も、むしろ登って行つたうえでやつた方が早
いんじゃないかと思うわけね。

新崎：そういうことを話してはいるのだけれ
ども、いろいろな関係・問題というか障害が
あつてなかなか。例えば「一坪反戦地主会」が
できた時、こういうことがあつたでしょう。
「一坪反戦地主会」の運動が旗揚げした時に、
平和委員会が何かで金を集めて平安さんの一
番小さな土地を急ぎよ買つて、ある意味では
「一坪反戦地主会」運動に対抗する形の運動を
作ろうとしたよね。現実には運動にはならな
かつたのだけれども、「一坪反戦地主会」の方

が圧倒的な形で進み始めたので、しょうがな
くとりあえずは「一坪反戦地主会」の中に入つ
たような恰好になつてゐるわけね。そんなこ
んなで歯切れの悪さというのを感じないわけ
でもない。それと、土地を売りたくないみた
いながあるね。だから、我々としては売
んじやあなくていいと、貸すんでもいいです
よと言つてゐるんだけどね。毎年こちらか
ら地料を払つて、「一坪反戦地主会」なりプロ
ツクの名で借りて、そこでそれこそイモを作
るんでもいいしね。三宅弁護士などは、そこ
でコンサートをやるとかなんとかいゝんなこ
とと言つてゐるけどね。そういうことも有り得
るのだけれども、うまい具合にじやあという、
こちらがやりたい方だけが集まれば出来ちゃ
うということではない。相手がいてくれない
と！。

安里：小塚だけじゃなくてね。例えば、今の
反戦地主ですとね、何人か契約に応じてゐる
人いますよね。そういう人達の土地でもね、

一坪とかね、とにかく一ヶ所にたくさん買うよりも各筆ごとにとにかく食い込むというのかね。契約せざるを得ない地主でも「一坪反戦地主会」の中に持ち込む感じで、この一筆をね、こんだけ分けてから残りを契約させるとかね。残っている一坪はみんなが入るという形でやっていけば契約がやり易いといったらおかしいけれど、いろいろ問題はあっても、現在契約やっている・すでにもう契約している地主も・今から反戦地主をやるにしてもね、人によってなる人となれない人もいるわけよね。あと反戦地主になりたいのだけれども、経済的な問題で出来ないとかね。ある場合は、そういうもんから一坪を買い取る形でその一坪をみんなで共有化やっていく。

新崎：何人かは、反戦地主会に三人か四人かは契約地主が入っているんだよね。そういうこともあるし、小椋に何んとか食い込んで、小椋に旗を立てたい気持ちがあるんだだけだね。「一坪反戦地主会」の共有地というのかね、みんなが行ってピクニックでも、コンサートで

- 19 -

もなんでもやると。

大宮：四年位前から言われているけれど、なかなか向こうの問題があるから。

安里：コンサートなんかやる用意はね、一応みつけてあるんですよ。那覇市の土地なんだけれども、右の方へ入って行くと近くに広がっている。

新崎：あれは那覇市の土地だから。

あそこに入っていると向こうから衛兵が飛んで来るよね。

安里：ただ関係ないですよ。向こうの土地じゃないから。ボクはこの間行っただけで、三宅さんとかどっちがいいか、コンサートやるには、やっぱり飛んで来るけど、こっちが地主だと、「ゴミ落ちているけど、これ遺棄がやったんだろう、ちゃんと片付けるよ」とつてね、向こうは何も言えないよ。

小林：そういうコンサート開こうかという話にしても、結局相手がいることだから、相手はどういう風に調停にするかだけだよね！

<新崎>

那覇市の土地なら、使うだけなら使えるけどね。

<安里>

那覇市の土地だったらね、表だっていったら貸すっていうふうには返すやりにくいっていうわけよ。だから勝手にやったらと、担当の人が、土曜日にやれば、通報がいつてね、じゃあということになっても、公務員が働くのは月曜日からさあな、それから調査してダメだといつても、もう終わっているわけさ。

<反戦地主の人々>

―連帯、共感を求め問う―

<小林>

自分は契約したくないのだけれども、契約せざるをえないひとたちと、どう言う具合に連帯していくのかという。「一坪反戦地主会」にしても、その理念だけでは連帯し切れないというか、理念プラス力量が付いてこない

-18-

と。信頼するに足りるというのをおな、一坪反戦地主と一坪にやっていく「ん」といふものの力を得ることはできない。

<新崎>

ただどうなのかな、これで二千人の一坪地主とやうのがでてきたわけだよ。で、相手さえあれば、土地さえ有れば、一坪地主を、一万人の一坪地主連帯なんていうのもできないことはないような気がするけどね。

<安里>

ただやっぱり、一万人を集めてもね。買い上げる部分は限られてくると思うんですよ。それを一人のものを買い上げていくというのはね、やっぱりズインじゃないかなという気がする。そして何かが救済措置みたいを感じになってね。闘争と言ってやるからには、一応助けられる部分は助けるけど、あちこちに連帯古から何から全部に土地を得ていつてね、穴が空いていていつた方がね。

<新崎>

だからその時に、その対称になるものが有ればさ、非常にやりやすいけどね。それと小さな土地を分譲して売ってくれませんか。そう言う条件が有れば、こちらは

あちやう土地のなかに、一坪地主の土地があるという方が、

<小林>

先程、新崎さんが言っていた、少し雷切れの悪いのは、他から働きかけがあるのじやないか、という話があったんだけれど、その働きかけをどう押し返すだけのね。

<新崎>

あとは、手繰らで時間をかけて、いろいろ遣っていかばと怒うんだけど。今は、阿波根弁護士なんかに働きかけてね、要するに彼らをこちらへという形で働きかけているけども、彼も反戦地主の運動ずっと長くやっているから、彼（阿波根弁護士）に言わせると、やっぱり、そういうもの（暗闘）より、個人的利害関係が、反戦地主と言えども、小森の人達のなかにいろいろあって、一本で通すとか、強制できるとか、そう言う問題ではないんだ、という言い方を頻りにしていたけど。ただ阿波根弁護士には、急いでくれっていつているんだからね、僞りるという形でも言い買うという形でも言い、とにかくなんとか遣ろうという話で、彼もそうやろうという話にはなっているのだけれども。あちらこちらから、手を交え、品を交え、人を交え、こういうのはちゃんと方針

を決めれば出来るというものではないからね。

<小林>

そういう働きかけはね、バックアップするというかさ、大衆的な盛り上がりというような感じだね、遣っていかないと、そういう働きかけで果たしてうまく納得してくれるのかどうか、その辺のところがあるのではないかな、という気がする。それが要するに、一つの目標、プロク活動の活性化を欠いてはない、ということに落ち着くんじやないかなという気がするんだけど。

そういう具体的な人々に働きかけるときに、普通の一般の会員というのは、それを見ているだけということしか今までしてこなかったよね。例えば弁護士さんなんかが出かけて行って、土地を貸してくれないかということ、ただただ見ているだけというそういう構造を変えていくというか。

<新崎>

そのところはどうにも変えようがない感じだな。皆んなでワーとおしかけていったら、びっくり仰天して、テンヤワンヤとかさ。

<小林>

いやそういうことじゃなくてね、皆んなでおしかけて

いくというわけじゃなくて、押しかけていくのは、代表
2、3名でいいのだけれども、彼らを支えているという
か所りと一緒に違っている連中がいるんだというのが、
形としてみえてくるということ、つまりそういう反戦運
動というのが盛り上がっているんだナというところでね、
反戦地主の人達を支えるという運動も広がってきている
んだというのを、具体的に覚えてこないと、実際の反戦
地主の人達が心細いというのかな、勇気付けるといふか
たちでの。

<新崎>

これは以前から言っていて、反戦地主を励ます会みた
いなものをやろうじゃないかと、連座共闘でもそれをや
ろうと苦勞したらしいけど、どうも反戦地主が、反戦地
主をきちんと集めきれないということで、反戦地主を励
ます会というのがオジャンに成ったという経緯もある。

この前の芸能フェスティバルのときにも、反戦地主の
家族とかは無料招待して激励をする場にしようというこ
とを、ボクや特に城間君などがいつていたんだけど、
今度は反戦地主の中でもね、真栄城玄徳さんみたいな人
達ばさ、なにも反戦地主を特別扱いする必要はないとい

- 20 -

う主張も出てくるわけね。彼なんかは芸能フェスティバ
ルなんかを、ずいぶん一生懸命やろうとした、中心にな
ってやろうとした人達だから、なにかこう反戦地主を持
ち上げてね、無料で招待しますみたいなのもおかしいん
だという人が反戦地主のなかにもでてくるし、これはや
っぱりむづかしいのよ、それはそれなりにまた一理あつ
てさ。ただ平安さん達は、やっぱりそういうのがあつた
方がいいなアーというのが強いんだよね、芸能フェス
ティバルなんかだつて皆んなに招待状が送られた方がいい
なアーというのが平安さんの意向なんかにはあつた。送
るだけじゃなくて、その時に激励する、こうなったら本
当にいいんだがと平安さんなんかはいうわけね。そして
ら真栄城さんたちはそうではなくて、自分がそういうの
を、運動を、反戦地主もそれぞれ加わるべきだという意
見もある。彼なんかは子供たちを全部一坪の反戦地主に
しているわけでしょ。照屋秀伝さんなんかも似たような
発想だよ。その辺反戦地主の中もいろいろでさ。で、
結局は、反戦地主にたいしては城間君がせつせと、招待
状は全部送ったはずだけど、ただそれは実行委員会な
実行委員会として特別な呼びかけとかさ、激励集会にし
ますとか、そういうことではなかったわけ。だからもう

少しなにか、二〇年強制使用とかね、反戦地主の何と
かっているのをやるべきだったというのが、ボクなんか
には強いですね。平実さんなんかも言っていたけど、や
っぱり反戦地主のグループとしてカチヤイシーに参加す
べきだったというから、そりやあそうだよって、そうで
ないまでも反戦地主の人たちは、やっぱり舞台で全部紹
介してね、フェスティバルなんだから、祭なんだから、
それなりに反戦地主を中心にした祭をもう少し出来なか
ったかなーという思ひはあるわけ。そういうことで、や
っぱりさっき言った心細さっていうのかな、心細いのは
心細いと思う、本当にもう地域的なまとまりがなくなっ
ちやって、百人でしょ、そりやあテコでも動かない人は、
真榮城武徳さんとか照原秀伝さんとかは、もうなにが何
だって関係ないんだけれども、そうでない人達、公團管
理にも来ない人達とかね、そういう人達は、やっぱりど
うするかということは、課題としてあるんじゃないか。

三、一坪反戦運動の更なる前進のために

-21-

＜大宮＞

力づけ、勵ますということについて言えば、例えば、
92年に契約期間満了があつて、再契約になりますよね。
そのときにどれだけ拒否者をこちら側が作っているか
っていうのは、こちらのいわば力量みたいなもの、裏付
けみたいなもの、ことっていうのは影響するだろうし、
で、いますでに反戦地主が數十名になっていますよね。
おそらく今後ある程度まだ減るだろうという予想はして
いますよね、潰滅の結果によつては。で、その時にどれ
だけ支えきれんかというのは、いはば力づけていくとい
うのは、直接的にフェスティバルみたいな形とか、いろ
んなかたちで激勵していくっていうこともそうだけど、
もっとこう全体的な反基地のいわば運動形成なり、そ
ういうものをどう高揚を實現していくのかっていうこと
が、課題だと思ふんですよ。で、「一坪反戦地主会」運
動っていうのが、そのために何らかの役割を果たしてい
けるのかどうか、ということが今後非常に問われてくる
であろうという気はする。そういうときに、いわば限定
した形で行ってきた運動「軍用地を生産と生活の場へ」、
直接的な課題としては、今直面しているところの二〇年

強制使用反対運動、まあ公開審理ですよ、今のところ、その限定された運動の範囲のなかの延長で、そういうことができるのだろうか、ということがボクは非常に問題意識を持っています。

一番最初にいったようなことと、いっしょなんですけども、つまり「一坪反戦地主会」というのは、いろんな考えをもった、いろんな積極的消極的にかかわらず、「戦争に反対し軍用地を生産と生活の場へ」という一点で結束しているわけですよ、その場合戦争に反対しという部分を守までの限定された活動といわれるなかでは、ほとんど不問になってきているといってもボクは過言ではないと思うんですよ。その辺の現実を今後どういう風にふくらましていけるのかどうかに、今後の在り方というのはかかってきているんじゃないかという気がします。

<小林>

ただ今の状態のままだったら「一坪反戦地主会」全体の方針なりが今以上にぼろぼろじゃないかね、むしろそこを突破するためには、やっぱりプロク活動が活性化してこない、現実を握ってこない、上の方も変えられないという状況があると思うんですね、上の方が変えられ

-22-

ば変わるんか、ていうさ。

<大宮>

いやいや、ボクもそれ原則だと思っただけで、ところで現在のプロク活動は、さっきいわれたように必要性を感じる部分、必要性の範囲で、やっぱり活動しているところ、プロク活動活性化しているところとしていないところ、っていうのは、いろいろな意味での差がありますよ、その時に今後もおそらく新しいプロクが積極的にできてくるとは思わないわけですよ、というのは、何故ならば、僕にも場がある、必要性を感じていないから、その時に、じゃあプロク活動を基礎にして、小林さんがいわれた言い方では、力量を具体化していくみたいなときに、現在活動してないプロクはどうなるのか、という問題があるのではないかと思うのです、だから今後は、一坪反戦地主会全体としての活動体制ということも必要になっていくのではないのだろうか、一坪反戦地主会全体としての運動も考えられていかないと、ついにじゃないかという気がします。じゃあそれがどんなものになるかというところ！

＜新陳＞

それはつまり、プロックはプロックでやりなさいという形で、何か突き放したみたいな格好になると、プロック自体も動かない。

＜大宮＞

いや動くプロックはずっと動いていくと思ふんですよ。しかし、それは全体の一時反戦地主会運動としたら、非常にむしろ極少数な動きとして、あとの多数がほぼ無動状態におちいつていくであろうと、でそういう事態についていうのは、ほぼみとおせるなかで、やっぱり一坪運動についていうのは作ってきた理念についていうものがありますからね。今までの運動の在り方の批判として作ってきているから、非常にこの辺はむづかしいのだけれども、いわば上からの指令で全体が動くんではないということ。だけど、カーン、ちよつと矛盾しているかもしれないけれど、そういうことがいっぺん必要になつてくるちやうだろか、例えば共闘問題に關しても、「日の丸、君が代」の集会のときも、結局いつてしまえば、下からの共闘じゃなかったわけですよ。ああいう形についていうのは、今後までてこざるをえないだろうし、出てきてもいいんじゃない

- 23 -

だろうか。プロックは独自にね、共闘とか、そりやあれはもうなにやつても自由だという原則から当然出てくる問題ですけど。

＜小暮＞

教育の反動化に對する集会の協賛団体になつていくという決定を、幹事会なら幹事会でやっていくというのはいいと思ふんだよね、どんどんやっていって。これは協賛してもいいだろうと判断したらね。ただ願わくば、それを会員に通知して欲しい。その中で、これチェックおかしんじゃないかということになれば、そういう意見が当然でてくると思ふから、それはそうなった時であつて、一応は世話人なり、幹事として承認しているわけだから、その人達がそういう決定していく。それともうひとつ、今大宮さんが話した、プロック活動がなされていくところが多量で、あとは無動状態になるんじゃないかと、もしそうなつたとしたら、それが現状だということ、ふまえて、出てきていくしかないという気もするんだけど。

＜大宮＞

そういうところは、ボクは必ずしも、それでもなお全体を運動体として残すべきだという風には、ちよつとわ

かないわけです。だから全体として維持すべきかどうか、ということが今問題になっているんだらうと、で、もし残す意義があるんだったら、そういうなんらかの具体的な手立てということも考えられていかなきゃならないだらうということ。もし必要を感じて、続いているそれぞれのブロックなり活動、それが現実だからそれでいいとするならば、ボクちよつと判断は出来ていないのですけれど、そしたらボクは別にそういうことは、いはばここでいったら全体的取組み体制の強化なんということは、考えられる必要はないと、という風には考えるんですけれどね。その辺、皆さんのようにかんがえているのだらうか。

＜小村＞

「一坪反戦地主会」が出来てきた経緯がさっき説明があつて、その中でいわゆる既製左翼っていうのかな、その頃から既製されていくというようなこともあつたのだけれども、要するに、既製されていくということは、それなりに既製左翼とはちよつと違うんだよっていうね、性格を持っていたと、いま「一坪反戦地主会」が進んできて、ところがブロック活動が必要なところでは作られてきたけれども、必要としないところでは作られてこなか

-24-

つたところが、依頼しているところはね、労働とか。

＜大宮＞
労働です。

＜小村＞

既製左翼の枠だと思ふわけよね。で、そこへ皆さんが吸収されてしまつて「一坪反戦地主会」の活動が活性化しないということになれば、むしろそれは、いわゆる既製左翼に吸収されてしまったという感じになる。それを突き動かすだけの運動まではいきえなかつたという、そういう結果でしかない。

＜新崎＞

ただ活動の場はそちらに求めてはいても、吸収される形ではないわけよね。多分。

＜小村＞

うん、そのところをどう判断するかだけど。

＜新崎＞

つまり、何らかの形で「一坪反戦地主会」に参加してくるのは、これではできなかつたから、できない部分を躍ろうと求めて参加してくるわけだね。だからそれはやっぱり、その既製の中に押さえ込まれているのを、それを若干ではあれ、変革する方向に、その部分について

のは動いているんじゃないかな。それはやっぱりどうなっているのかということは、具体的にひとつひとつ、具体的に点検してみないとわからないけど、本当に吸収されちゃって、ただ名目だけになっているのか。ただボクはやっぱり、そういう吸収されているように見える人たちの中でも「一坪反戦地主会」に参加していることによって、一つの拠り所を持っているんじゃないかなという、つまり、そういう労組とかさ、何とかいう枠を越えた広がりがある「一坪反戦地主会」という形であって、それが拠り所になっているのかな、それはないだろうかと思うけど。

＜小林＞

そういう意味で考えていけば、例えばプロック会議でね、労組の方で自分たちは足場があるんだという人たちまでも、一応プロック会議にでてもらって情報交換するなりね、今労組の方でどういう具合に働きかけているとか、それにたいして「一坪反戦地主会」は、プロックは、バックアップすることはできないだろうか、そういう作戦会議みたいな場所ね、プロックというものをしていればいいんじゃないかな、という気はするんだけれども。

- 25 -

＜新橋＞

今のはさ、我々が運動の上で整理をするんであって、本当にねプロックを作らないところの人たちが、そういう具合に、おれ達は発言の場があると思っているのか一体どうなのか、そのところも少なくとも意識はしていないはずだね。それはね、ちゃんとプロックがお前のところでは出来ていないんじゃないかという、皆んな「イヤーすまません。どうも忙しくて。」というんで、おれ達はこっちでやっているから、プロックはとりあえずおろそかになっているんだという言い方もしないし、いつも北郎プロックあたりに叱られちゃあ、「申し訳ない」って、中部や那覇は。

＜小林＞

だから、その辺がね、ちょっとよくわからない。

＜安里＞

組合の活動だったらさ、確かに反戦運動とかいろいろやっているけどよ、一坪と基本的にぜんぜん違うのはよ、組合に入ってどんなに活動してもさ、反戦地主じゃないわけよね。「一坪反戦地主会」に入ってくるというのは、要するにね、反戦地主になるっていうさ、そういう意味での一坪の評価っていうのは、当然大きいと思うわけ、

ただ地主になる以外の活動はさ、どっちが通り易いかっていうのは、人それぞれあるとおもうしね。今いった組合が吸収だとか、こっちが吸収しあうだとかさ、おのおのが反戦地主になろうとおもったら、「一坪反戦地主会」に入る以外に方法がないわけ、そういうことで反戦の意思表示やるということで、「一坪反戦地主会」に入ってきていると思うんだよね。ところが具体的に日常的な闘争とかなんとかだったら、こでなくても充分にやっていけるっていうの、そういう感じはあると思ね。どちらか一つにね、入るとか何とかではなく。

<新崎>

こういう既合いの場っていうのはなかったよね、整理をしてね。

<大宮>

今後各ブロックでだんだんやっていかなくちやあ。やっていけばいいんじゃないですか。

<安里>

ブロック活動、地域ブロック活動って全然乗り気しないな。この間も「説明」やるのにハガキだしでも、集まらない。

<新崎>

- 26 -

やっぱり地域ブロックの方がいいのかな、そういうところ（連絡体制などを考えあわせると）。

<大宮>

実態としては、地域としてけっこう連絡網になっているわけですよ。

<安里>

だから例えば、署名用紙にしてもね、同じ地域の、同じ地域のという風に渡っているとさ、どんなけやってくれなつて、そしたら他の地域とかは関係ないわけ、一坪だったら全部埋めさせるといふ、そういう具合にやっているからね、実態としては、ボクは同じ職場というよりも、この人は同じブロックだからということだ。職んだのだけれど、この人からまた次の人に行くときは、同じブロックとかそんなじゃなくて、知り合いだからだとか、地域だけにやったら（ブロックの形を）やっぱり労働とか、何とかに入っていない人とのね、つながりというものはどうするのか、様子見て地域でも作ろうと思うけど、そんなに強い北部ブロックみたいなね、強さが全部に求めて、まあの方がいいのかね、その辺についてはちょっと疑問ですけどもね。

<大宮>

少なくとも、地域ブロックは、各職域の地域としての連絡会くらいの機能果さないで、しょうがないような気がする。今、それも果せていないところが多くて。

<安里>

職場はね、そんなにブロックとか何とかの意識はなくともね、だいたいはいっしょなんだよね。

<大宮>

日常の実験、活動のルートだから。

<小林>

自分なんかが考えるとき、ブロック活動を主体にして作ってこういう方針が、どういう具体化されてきているか、というより、どういう風に具体化に着手したのかというね、その辺の状況の情報不足というか、があつて、むしろできていない（ブロックが）ところの人々と話し合つてみる必要がある。

<新崎>

問題は、出来ていないとこの人が、来ないってのがおおいけど。

<小林>

連絡が全然来ない。

-27-

<大宮>

たとえば、ボクは中部ブロックの会員でもあるわけですよ、ところが中部としての取組みの連絡は全然来ないわけですよ。しかし新聞などで時々中部地域でも署名やったとか、この間でいたんですけど、あれなんかもわからないわけ、で、ボクの場合は、民間未組職ブロックにも入っているから、こっちからいろいろな動きとか分かるんですけども。結局、ユザ、那覇は、ブロック会員そのものを掌握する活動は出来てないですね。

<安里>

那覇だったら、もう三つに分ける必要ないんじゃないかとおもう。一つにまとめてよ、だいたい実験に来そうなんつていうのは（日常的活动を担ってくれる人）合計二〇か三〇、せいぜい五〇人ですよ、こんだけむしる動いてね、やった方が、逆に細分化やりすぎて、集まっても小人数だけ集まってる、逆に身動き取れない。それなら那覇なら那覇で一つにまとめた方がね、実際に動ける力量というのはついてくると思うわけ。

<大宮>

でも現在的にはそうかも知れないですけど、当初は小

人数の方が小回りが効くということだ。

<安里>

実際に来る人がね、二〇〇も三〇〇もいてさ、統制きかないということだ、じゃ分けようかというのならね、分けた方がいいわけ。ところが最初に分けてしまつて、実際に各ブロックね、動けない人数だけ集まつている状態で、結局なにも出来なくなる。三つを一つにやつてね、実際に動けるだけの人数確保をやって、動いていって増えていけばね、動く人が、また分けた方がいいんじゃないか。

<新崎>

それが現実的だろうね。

<大宮>

だから群馬の場合は、三ブロック連絡会議なりなんなり、第一事務局、連絡事務局みたいなのを作らなくてはならぬ。

<安里>

いや、そんなじゃなくて、一つの地域として群馬ブロックとした方がいいね。

<大宮>

それは、群馬ブロックの問題として検討されるべきで

しょうね。

<小林>

ブロックの連絡体制というのは不思議なんだよな！、外から見ているとさ、なんかやっている人は集まつてやっているみたいでさ、ボクも同じ会員なのに連絡は全然来ないという具合で、だから連絡とっているひとはどういうルートで連絡とっているのかな！と思って。

<大宮>

結局、「一坪反職地主会」を組織していくときに、自分の機々なルートで会員を募ってきましたよね。連絡体制が未だにこういう体制が色濃いと思う。

<安里>

小林君だったらさ、同じブロックというんじゃないでね、民間未經組織ブロックでという式でしか見ないわけよね。だから真知志ブロックで連絡を断つていてさ、「小林」というのはスッポリと抜けるわけ。

<新崎>

大宮さんも同じで、中部では、あの人は民間未經組織で、ということだ中部からはずれているわけよ。

<大宮>

だから、労組は労組で会員募ってきているから、そこ

のルートで回るみたいですよ。で、いわゆる非組織の人というのが、人脈ルートというのがはっきりしていればまだ伝わりやすいけど、外れている部分というのが、全体の動きがさっぱりわからない（という状態に置かれる）。

<新潟>

やっぱり、名簿の管理などがきちんとできていないのだらうな。だけど、地域別の名簿みんな流れていると思うけどな。

<安里>

いや、たまに連帯共闘に遊びに行くけどね、変換されてきたハガキなどを見るとね、ちゃんと整理されていないようです。公開審理の案内のハガキの返却分が大体これぐらいある。それで裁判の委任状取るときに、自分の地域を回ったんですけれども、引つ越しやらなにやらが多くて全然つかぬ。

<新潟>

そうだとすると、取用委員会が議決書渡したり、防衛施設局が保証金を渡すなんかというとき大混乱を起こす

のかな。

<大宮>

でも彼らは、きちんと住民票を遡ってやるでしょう。だからボクなんか引つ越したことも向こうにいわなくても、きちんと（ハガキなど）来ますよね。

<新潟>

向こうだけ、正確につかんでいるわけだ。

<大宮>

まあ、ボクらにはそこまでの能力がないから、いつもチェックしていくしかないんじゃないかな。

<安里>

いま、真和志ブロックだったら、「字」別にリストを作っているわけ、「安里」とか「勢多川」とかね。そしてその辺の人にあれば回ってくるんじゃないかと思っている。真和志ブロックとはいっても、要するに連絡は細分化されているのではなくて、いまいった種別とかで連絡がなされているんだけど、実際地域でやるためには、同じ「字」に住んでいる人間志がまず集まっていいた方がいいんじゃないかと思うんだけど、ただむずかしいのは、古島に住んでいて、北谷とか美里に職場がある人（特に組織労働者）は、そういう場合、実際に動く

したら中部でしか動かないはずだし、こっちに帰ってくと六時七時で、それから風呂入って食事してからというのでは。

＜大宮＞

第一回は大体こんなものですかね。

春の幹事会で今後討論することが確認されたところの共闘問題を、どういう風にブロックの中でも考えていくのかということが中心になっているのですけれども、なかなかそこまできかなかつたけれど、第一回の問題意識の交換ということでは、この辺にしておきましょう、こんどこれをどうしていくのかというのは、一つは通借に就けること、今後第二回、第三回と、座談会なり、内部でやっていくかは、事務局（ブロック）で具体的に検討していくことにします。

（終わり）

出席者

- 新崎 盛賢（二坪反戦地主会、代表世話人）
大宮
小林
安里
下地
上原
木村

＜資料＞

民間未組織労働者ブロック懇談会及び、今日の座談会に提出された資料文書

（一） 共斗問題について

（山縣）

一坪反戦地主会が今後、革新、平和、市民諸団体と、諸運動体と共闘を行っていくのか、いかないのか、また

行っていく場合どのようなものか等、この間の経過及び今後一坪反戦地主会が運動を進めるにあたって課題となつてきているということである。経過等については事務局（ブロック）から説明があると思うので、この共闘について私の意見を述べてみたい。

一坪反戦地主会会則で「第二条（目的）この会は戦争に反対し、軍用地を生活と生産の場に変えていくことを目的とする。第三条（活動）この会は前条の目的達成のために、次の活動を行う。一、一坪反戦地主を拡大し、相互の団結を強化する。二、反戦地主と連絡する。三、未契約軍用地を返還された反戦地主を支援する。四、契約拒否運動を拡大する。五、その他、反戦平和運動に関する活動を行う。一とうたわれている。また毎年度の活動方針には必ず第三条の五が入っている。一坪反戦地主会の運動の基本が、反戦地主に連絡し、その闘いを支援し、共有し、共に闘うということであるが、会則の目的・活動からすれば、また結成に至る経過からすれば、それにとどまるものではない。積極的にかつ基本的に前述のことはふまねばならないが、むしろ一坪反戦地主会の目的から導き出される具体的活動をいうものであって、これに限定されるものではないと考える。そこで会則一

月の「一坪反戦地主会」結成に至る経過」を検討しても
らいたいと思う。

「わたしたちは、組織論的にも運動論的にも新しい試みに挑戦したいということである。会則や方針は、最低限必要な原則的なものだけを確立しておきたい。わたしたちはピラミッド型の上下関係をもちた、労組、政党内の組織をつくるのではなく、住民運動タイプの地域的な組織単位（ブロック）が並列的關係に立ち、それぞれが個性を発揮して自立的運動の主体となりうるような「組織」をつくりたい。一と新時代世話人は述べている。

一坪反戦地主会の運動を前述の基本的なことだけに限定してしまう、あるいはそこから一歩出ようとしたとき考へてしまうことこそが、まだまだ既成の「政党内労組」の組織と運動から自由でない、解放されていないことを示しているのではないだろうか。「状況を創造的に打開する」とは「新しい試みに挑戦する」とは、何等かの想定があらかじめあるわけではないし、イメージが固定しているわけではない。それにならって活動を運動を組織を展開するということではない。まさに様々な試み、挑戦があつてよいのではないか、それは運動の領域だけににとどまらず、組織の領域においてもそうなのであり、

その保障として「それぞれが独創性を発揮して自立的運動の主体となりうるような」ということが語られていると思う。

だから「共闘」へこういった形骸に限らず」といったことに備えて、具体的にみてみれば、それぞれの一坪の会費が個人としてであれ、仲間をかたらつてであれ、グループであれ、サークルであれ、課題と運動の提起があれば、呼びかけ即実行すればよいのである。次にそれが一回り大きくなってブロック活動として取りあげるならば、それも呼びかけ即ブロックとして実行すればよいのである。更に一回り大きくなって一坪反戦地主会として取り組むのならばそれでよいのではないか。考慮されるべきは、一坪反戦地主会が様々な思いをもった人々の集りであることから、一個人の、グループの、サークルの提起がブロックとして、あるいは地主会として取り組めない場合もあるであろうということである。だけれども、そのことによって規制されるということではない。「最低限必要な原則的なこと」から逸脱しない限りそうであり、もし取り組めないからということでは覆轉する、されるところのならば、自からに対する死の宣告と同じであろう。独創性を押し込め、新しい独断は運送状態にとどめられ

るのである。

各々が創造性をもち、新しい試みに挑戦すること―古くから語られている反戦平和の古いイメージを我々は払拭すべきであり、新たな反戦平和の闊い領域と内実をこれによって創り出し獲得していくべきである―によって各々が学びあい、時には相互批判を経ることによってのみ、めざすべきものが異体性をもって獲得されるものではないだろうか。一坪反戦地主会が結成されたということは、一つの完成ではなく、それによって運動を展開するというのはなく、一つの批判的出発であり―というのは革新的諸運動総体にたいする実践的批判だから―完成へ―新たな革新運動の構築―向けて歩いているのであり、恐れるべきはちゅうちよと怯だけであると思う。最後に、使いたくはない言い方だが、いわゆる下から大きくなっていくのに対して、地主会が当初から共闘を提起し取り組む場合もあるであろう。それは、これまでの一坪反戦地主会の運動がそうであったようにこれらの問題も取り扱われるであろうこと前提として、我々は、我々が承認した世話人・幹事会を信頼するという他はない。それが会員の多数によって受入れがたいものであれば、方針あるいは人事をめぐって云々というのは、これまで

のやり方であり、現在それは有効性をもっていない。なされるべきは、各々の会派、グループ、サークル、プロックの実際的行動―運動によって批判されるであろう、というのが将来と現在とに可能性をもったものであると思う。一例をあげよう、二十年強制使用に対して、全国的な抗議行動―集会をいつまでも一坪反戦地主会からの最後通牒ともいえる申入れ（大会決議）を受けてようやく集会をもった―もてなかつたは何故か、緊急な、そして誰の目にも明らかで重要な課題に対して、統一と団結ということで何ら行動がとれないのならば、そんな名前だけの統一と団結は捨てるべきである。このような状況の中にあつては、闘いの中から、行動の中から統一と団結を勝ちとっていく他はないと思う。

（以上）

（二）

一坪民間未組織運動の課題

（上原）

一坪の運動とは、言うまでもなく反戦地主を支援し二十年強制使用に對し闘つていくことである。しかしながら、二十年強制使用に對してのみ闘つていけばよいものであるうか。それは、おのずと否である。何故ならば現

在日本政府の攻撃が二十年強制使用のみにあるということではない。中曾根の戦後政治の總決算・臨調・行革・憲法審と打続く、戦争準備体制作りの中に沖縄の「日の丸」・「君が代」を始め来年の天皇来沖がある。とりわけ、先の国政選挙で自民党が圧勝したということは、彼等がいかに必死になつて金を使い、ファシズム体制を作っている証である。そのような状況の中にあつて我々がとるべき行動とは何であらうか。それは、我々の子供達を戦争で失つてはならないし、又我々も侵略戦争に加担してはならないということであらう。その為に、我々は、敵の攻撃を一つ一つ打破り、味方の団結を強めなければならぬ。その為には、沖縄・日本のみならず、フィリピン、「韓国」の人々を始めとするいわゆる第三世界の人々と具体的に連帯していかなければ我々の未来は無いであらう。そのような観点から、今年の天皇来沖、単純に天皇が沖縄に来るということではなく、渡状的に皇族が来沖し、その總仕上げとして天皇が沖縄に上陸し、「日の丸」・「君が代」を愛する皇国臣民になつてもらうということなのである。我々は今既成の運動を見る時、今年の天皇来沖に對して何一つもしてないのではないかと、危惧するものである。八三年の皇太子来沖を想起せ

よ！その様な中であつて、一人でも反対の意思のある人を我々が組織していかなければ、敵はますます自信を深め、沖縄に対し攻撃を仕掛けてくるであろう。現下の「日の丸」・「君が代」攻撃は勿論、今年の天皇来沖縄対国争に向け我々は行動しなければならぬ。時代は我々が思っているよりも大変な時に近づいている。

(以上)

(三)

一 坪反戦地主会運動の今後(其間問題によせて)

(大宮)

A 私の間題意識のあるところ

八七年五月十五日以降の坪反戦地主会の具体的な実践問題は、現在の活動の延長からは、現在凍結状態にある使用認定無効訴訟の裁判闘争(新たに使用裁決不服の訴訟が加わるかもしれない)、九二年契約期限切れを覚悟えた、契約拒否運動が現時点では暴定しうる。そして、この両者ともに大衆的な運動の組織化は、それらの自主的迫及としては非常にむづかしいものであり、結局は意識的な「活動家」によって担われざるを得ないであろう。

- 24 -

現在の沖縄の諸MOが労組MOにほぼ依拠しており、しかもそれ自体混沌と右傾化にある現状に対して、一坪の可能性(沖縄(階級)闘争の主力になることはできぬが)、組合主義的政治闘争と一定分岐、表現手段を持ちえてこなかった部分にその場を与えた。

・現実的実践、当然にも眼前の「米軍用地特措法」再発効に対する闘い。その現在の焦点である公開審理闘争への集中。

C 共闘問題

・坪反戦地主会MOがMO体として持続・発展していくには：

具体的実践の場の必要、→そのためには「戦争に反対し」の内実の強化→その間の拡大方向を取ること、それにもとづく実践の取りくみ。講演集会などから、反基地闘争などまで。

・共闘に関して

反戦・反基地はひとり坪反戦地主会の問題ではなく、沖縄の全人民的課題。→従って当然共通する課題、共に闘える部分との必要に応じた連携。共闘は良いことであるばかりか、積極的に行っていく必要あり。

現在の二坪反戦地主会運動からは、この二つの課題が浮かぶが、しかしそのみでは恐らく二坪反戦地主会は運動体としては分散、停滞状況に陥らざるを得ないと思われる。私の問題意識のあるところは、では二坪反戦地主会は、運動体としては八七年五月十五日以降、解体してしまっても良いのか。あるいは運動体として持続させていく必要があるのか？ということである。これは二坪反戦地主会をどの様に考えるのか？その運動は沖縄（階級）闘争にとってどのように位置づけられるのか？ということが、その可能性をも含めて問われている。ということだと思ふ。そして、ではもし運動体としても持続させていく必要があるとするならば、そのためにはどの様な内実と実践が必要とされるのか？が問題とならざるを得ない。

今、二坪反戦地主会には、このような論議が必要とされていると考える。春に一旦、幹事会で議題とすることが確認されている「共闘問題」は、私はこのような問題の一環として考える。

B 二坪反戦地主会

・結集軸

反戦地主会への共闘と連帯の根拠（二坪）
「戦争に反対し、軍用地を生活と生産の場へ」

・会そのものの意義

・運動体としての意義・位置

☆「手続きを煩雑にする」（数量問題）——中核——や「覆ていてもできる反基地闘争」——K氏——などは、いわば結果であって、それも一面、一部分でしかないこと。

D 組織上の問題

・二坪MOはブロック活動を基礎とする。はMO上の理念であり崩さない。しかし現在的にも完全にこれを実現していると言えるのは沖縄本島では北部ブロックのみと見て過言でない。八七年以後MOが分散方向にむかわざるを得ない現実の中で、MO体として持続していくためには、勿論日活動の活性化を原則としつつも、二坪全体としての取組み体制を強化していく事が考えられいかばなるまい。

E 予感

恐らく、これらがどうなっていくかの大きな試金石となるのが、八七天皇来沖問題となるであろう、と予感する。

(以上)

へ編集後記

・11月下旬が発行予定だった
 (今月は無理)次回は月内公開審
 理に(やてやまなくはなれた)後
 とは野となれ山となれで、と
 うとう本日発行。

・ある会員の友達へ、この場を借りて二度度
 目のお願いをします。まだに水から出
 頼の返事が届いていないというのを、睡一の無
 リ所として。

・定価ばかりではなかなか売れない。カト
 字夏、絵がホシイ。あるいは宣伝の
 スペースも取ります。倒えば、本を買
 うなら「すばる書房」(つまり近頃)
 贈り物には陶器を、会員の陶工が代
 をこめて作ります。写さ、印刷は
 キレイ、ハヤイ、何によりも経済的な
 〇〇印刷、本が印刷へ。

(P.K.I.)



ひとりごとあるいはつばせき

へ如月ゆり

私たちも一度はつかみ得たもの 神州不滅の日本といつて浮かぬもした それを壊したの
戦争 「戦争でなくな、た人たちのぶん私たちが幸せつかんでいいですか」 戦争で壊された
るべき幸せならば 幸せをつかまず 幸せを望まず 戦争と斗いなさい 私たちも一度はつか
み得たもの 神州不滅の日本といつて浮かぬもした そして 死んでしまった 私たちは何も
でもない あいつは生きている 生きつづけている それでも 幸せをつかもう とするあなた
たち もまた 生きつづけているか 戦争で死んだ私たち 生き返って幸せをつかもうなどと思
ぬかい 断じて思わない あいつを道づれに この世とみさらばしたあの時 あの場所へ戻
て行こう それが死んでしまった私たちにできることであるならば ぞろぞろと あなたたち
が あの時 あの場所へ ついて来るのなら それもいいだろう いっしょに捨てよう 生き
つづけているものを いっしょにつかもう幸せを 私たちだって 死んでしまった私たちだっ
て 死んでも幸せになりたいよ

—— あいつは生きている 天皇として生きている ある人は 首をかしげて 何かしなこと
だと思つた ある人は 選擇して 涙を流した トウジョウは 横を向いて 事を喰わば
あまでもだ と いつた ——

非親善の記録フィルム 一フットフィルム それは告発だった 戦争の人間の暴露ではなく
現代への告発だった 一フットフィルム それは 証言ではなく 挑発だった 戦
争の人間の暴露と証言による 告発と挑発だった かつての事実を見やることによつて 現代
を見せつけた 一フットフィルム そこに映つていたのは 圧倒的な攻撃であつた 思はず鬼
畜米英